梓弓

（第二十四段）

要旨

昔、ある田舎の男が宮仕えをしに上京して、三年も音信が途絶え、残された妻は、慕い寄る新しい男と結婚をすることにした。その結婚の当日、昔の男が戻って来たが、女に結婚をすることを告げられて、真心のこもった愛の歌を詠んで帰ってしまった。女は、男への変わらぬ思いに動かされて、男の後を追ったが、追いつけずに、とある清水の傍らで、倒れ、岩に指の血で歌を書き付け、死んでしまった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P六九・6（新枕すれ）	昔、片田舎に住んでいた男が宮仕えのため上京し、三年もの間音信が途絶えた。残された妻は、長年懇ろに求婚してきた男と結婚することにした。
第二	P六九・7（と言ひ出だしたりければ、）～P六九・11（男帰りにけり。）	その結婚の当日、男が戻ってきたが、女に別の男と今日結婚することを告げられて、男は自分の女への愛と新しい夫との幸せを願う歌を詠んだ。女も男への変わらぬ気持ちを詠んだが、男は帰ってしまった。
第三	P六九・11（女、いとかなしくて）～終わり	ひどく悲しく思った女は、男の後を追ったが追いつけずに、とある清水の傍らで倒れ、岩に指の血で歌を書き付け、死んでしまった。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①昔、男、片田舎に　住み　けり。
格助・場所　マ四・用　過・終

②男、宮仕へし　に
サ変・用　格助・目的

三年　来　に、
カ変・未　格助・状態

いと　ねむごろに
形動ナリ・用

契り　たり　ける　に、
ラ四・用　完・用　過・体　格助・時間

戸　開け　給へ。」
カ下二・用　補動・ハ四・命(尊)男→女

③「この
代　格助・体修

歌　を　なむ　詠み　て　ただ　今
格助・対象　係助・強意(係)　マ四・用　接助・理由　副

とて、別れ　惜しみ　て　行き　に　ける　まま　に、
格助・引用　マ四・用　接助・単接　カ四・用　完・用　過・体

ざり　けれ　ば、待ち　わび　たり　ける　に、
打・用　過・已　接助・順理　バ上二・用(タ四・用＋補動)　存・用　過・体

言ひ　ける　人　に、今宵　会は　む　と
八四・用　過・体　格助・対象　八四・未　意・終　格助・引用

この　男　来　たり　けり。
代　格助・体修　カ変・用　完・用　過・終

と　たたき　けれ　ど、開け　で、
格助・引用　カ四・用　過・已　接助・逆確　カ下二・未　接助・打接

て　出だし　たり　ける。
接助・単接　サ四・用　完・用　過・体(結)

④あらたまの　年　の　三年　を　待ち　わび　て　ただ　今
(枕)　格助・体修　格助・経時　バ上二・用(タ四・用＋補動)　接助・理由　副

宵　こそ　新枕　すれ
係助・強意(係)　サ変・已(結)

と　言ひ出だし　たり　けれ　ば、
格助・引用　サ四・用　完・用　過・已　接助・順理

⑤梓弓ま弓槻弓　年　を　経　て　我が　せ　し　が
(序)　格助・経時　八下二・用　接助・単接　代　格助・主格　サ変・未　過・体　格助・体修

①昔、ある男が、片田舎に住んでいた。②男は、（都で）宮中勤めをしに（行く）と言って、（女と）別れを惜しんで行ってしまったまま、三年帰ってこなかったので、（女が）待ちくたびれていた頃に、たいそう懇ろに求婚してきた人に、今夜逢おうと（結婚の）約束を交わしたその日に、この（昔の）男が帰って来た。③（男は）「この戸を開けてください。」と（言って、戸を）たたいたが、（女は）開けないで、歌を詠んで（男に）差し出したのだった。

④あらたまの…三年もの間待ちくたびれて過ごしてきましたが、私はちょうど今夜、ある方と新枕を交わすのです。

と詠んで差し出したところ、（男は）

⑤梓弓…長い年月を重ねて、私があな

ごと　うるはし　み　　せよ
比・語幹　ミ語法（形シク・語幹＋接尾）　サ変・命

と　言ひ　て、　往な　む　と　し　けれ　ば、　女、
格助・引用　八四・用　接助・単接　ナ変・未　意・終　格助・引用　サ変・用　過・已　接助・順理

⑥梓弓（枕）　引け　ど　引か　ね　ど　昔　より　心　は　君
カ四・已　接助・逆恒　カ四・未　打・已　接助・逆恒　格助・起点　係助・区別

に　より　に　し　ものを
格助・対象　ラ四・用　完・用　過・体　終助・詠嘆

と　言ひ　けれ　ど、　男　帰り　に　けり。　⑦女、　いと　かなしく
格助・引用　八四・用　過・已　接助・逆確　ラ四・用　完・用　過・終　副　形シク・用

て、　後　に　立ち　て　追ひ行け　ど、　え　追ひつか　で、　清
接助・単接　格助・場所　タ四・用　接助・単接　カ四・已　接助・逆確　副　カ四・未　接助・打接

水　の　ある　所　に　伏し　に　けり。　⑧そこ　なり　ける　岩
格助・主格　ラ変・体　格助・場所　サ四・用　完・用　過・終　代　在・用　過・体

に、　指　の　血　して　書きつけ　ける。
格助・対象　格助・体修　格助・手段　カ下二・用　過・体

⑨あひ思は　で　離れ　ぬる　人　を　とどめ　かね　我
八四・未　接助・打接　ラ下二・用　完・体　格助・対象　ナ下二・用（マ下二・用＋補動）　代

が　身　は　今　ぞ　消え果て　ぬ　める
格助・体修　係助・提示　係助・強意（係）　タ下二・用　完・終　定・体・結）

と　書き　て、　そこ　に　いたづらに　なり　に　けり。
格助・引用　カ四・用　接助・単接　代　格助・場所　形動ナリ・用　ラ四・用　完・用　過・終

たを愛したように、新しい夫を愛して、むつまじく暮らしなさい。

と（男は）詠んで、立ち去ろうとしたので、女は、

⑥梓弓…あなたの私へのお心はどうであっても、私の心は昔からあなたにお寄せしておりましたのに。

と詠んだけれども、男は帰ってしまった。⑦女は、ひどく悲しく思い、（男の）後について追って行ったが、追いつくことができず、清水が湧いている所（まで行って、そこ）に倒れ伏してしまった。⑧（女は）そこにあった岩に、指の血で書き付けた。

⑨あひ思はで…私が思っているのに、私のことを思ってくれないで離れて行ってしまった人を、引き止めることができなくて、私の身は今、こうして絶え果ててしまうようです。

と書いて、その場で死んでしまった。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 梓弓とは何かを想像する。知技(1)ア
❷ 全文を音読する。思判表B(1)ア
❸ 重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウエ
→「言葉と表現」1
❹ 現代語訳する。知技(1)エ　思判表B(1)ア
❺ 四首の歌を解釈する。思判表B(1)イ
→「学習のポイント」1
❻ 男の歌に表された何が、女の気持ちを変化させ、後を追わせたのかを考える。
❼ 血文字で歌を書きつけた女の心情を考える。

❶言葉から来るイメージを描かせる。
【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。
❷範読を聞かせた後、単独読みや一斉読みなどをさせる。音読することによって、全体の構成もつかむ。
【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。
❸四首の枕詞・序詞、「わぶ」「うるわしみす」「よる」「かぬ」の意味を辞書で調べさせ、古語と現代語の意味の違いに着目させる。「かなし」「いたづらに」など、主題にかかわる語句の意味にも注意させる。また、係り結びの用法を確認させ、女の困惑した心情を強調していることに気づかせる。
【評価】・序詞、枕詞を調べることにより、我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。
・重要古語を辞書で調べる、係り結びの用法を確認させることを通して、古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、テストなどで確認する。
・古今異義語に着目させることで、時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、テストなどで確認する。
❹三人（男（夫）・女・新しい男）の関係を明確にしたうえで、物語の流れをつかませる。
【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。
・現代語訳をさせることにより、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、プリント、ノート提出などによって確認する。

❺歌に詠まれた女・男それぞれの心情を読み取る。特に女の気持ちが変化していくことに着目する。

【評価】歌に詠まれた心情を読み取ることにより、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、確認する。

❻男（夫）の女への思いやりが、新しい男と生きようとしていた女に、男との深い愛を思い起こさせたことに気づかせる。

❼女の情の深さ、無念さ、諦念などを読み取らせる。

まとめと発展

学習活動のポイント

❶女の死という結末の印象を話し合う。主態 →「言語活動」1

❷女（男）の生き方について考える。思判表B(1)エ

❶女の死が必然のものとして感じられるのは、生の純粋さ、燃焼度の高さによることを気づかせる。女の生きる世界は男との過去でしかなく、死をもって終わることしかなかったことを理解させる。

【評価】学習課題に沿って、「そこにいたづらになりにけり」という結末が「梓弓」をどのように印象付けているかについて、粘り強く話し合っているか、分析する。

❷〝もし自分が女（男）だったら〟と仮定した短い感想文を書かせて、それぞれの心情をより深く読み取らせる。それぞれの感想文を発表し合い、さらに考えさせる。

【評価】作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、感想文や感想文の発表によって確認する。

指導上の注意点

●六九ページ

問 **「男、宮仕へしに」（2行目）の後に省略されている語句は何か。**

答 「行かむ」。

問 **◉「この男」（4行目）とは、誰のことか。**

答 「宮仕へしに」上京した男。

問 **女はなぜ他の男と再婚することにしたのか。**

答 昔の男から三年間音沙汰がなく、新しい男が親切に言い寄って来たから。

補 「待ちわび」の「わぶ」に着目させ、男への愛はそのままに、新しい男の熱心さに結婚を承諾したらしいことを読み取らせる。

問 **「あらたまの」（6行目）の歌に見られる修辞上の技巧をあげよ。**

答 「あらたまの」が「年」を導く枕詞。

補 「あらたまの」は、「年」「月」「日」「春」などを導く枕詞である。

問 **「あらたまの」（6行目）の歌に込められた女の気持ちを述べよ。**

答 新しい男と今後の人生を送る決意と、よりによって新しい男との「新枕」の日に帰ってくるなんてという困惑が表されている。

補 「こそ…すれ」という係り結びに着目させ、女の驚き嘆く内面を想像させる。

問 **女が、男と顔を合わせることなく、このよ**

語句の研究

●六九ページ

2宮仕へ　宮廷や貴人の邸宅に仕えることで、ここは、そのために都に行ったことを言う。

2行きにけるままに　「行ってしまったまま、行ってしまったきり」。「ままに」は「そのまま」の意の名詞「まま」＋状態を表す格助詞「に」で、「…そのままで」の意。

3三年　「令（りょう）」の戸令（こりょう）に、「已に成ると雖も、その夫外蕃に没落して、子有りて五年、子無くして三年帰らざるとき、及び逃亡し、子有りて三年、子無くして二年出でざる者は、並びに改嫁を聴す。」とあり、夫が消息不明で三年も経てば他に嫁してもかまわない習慣などにより、「三年来ざりければ」としたものと考えられる。ただし、その解釈を否定する見解（黒澤弘光ほか「心にグッとくる日本の古典」ＮＴＴ出版　平二十三）もある。女の待ちわびた気持ちや三年という月日の長さなどを生徒に感じさせたい。

3待ちわびたりけるに　「わぶ」は思いどおりにならずに気落ちしたり、困惑したりする状態を言う語で、補助動詞として用いて、「…しかねて思い悩む、…する気力を失う」の意を添える。「に」は、時間を表す格助詞とする解釈（「日本古典文学大系」ほか）に従ったが、「待ちくたびれて」「待ちわびていたが」「待ちくたびれていたので」など、接続助詞ととる注釈も多い。

4会はむ　「会ふ」は、ここは、男女が夫婦として交わることを言う。

5出だしたりける　外にいる男に歌を出したということで、女が男に会うことなく、事情を伝えたことを表す。

6あらたまの…　「続古今集」恋四に「よみ人知らず」としてあるが、「伊勢物語」からとったものであろう。「ただ」は「直接に、ちょうど、すぐに」などの意の副詞。「新枕」は、男女が初めて共寝をすること。

8梓弓ま弓…　「梓弓ま弓槻弓」の句は、「神楽歌」の「弓といへば品なきものを梓弓ま弓槻弓品も求めず」（一説に「品こそありけれ」または「品こそあるらし」とする）を本歌とするか。「梓弓」「ま弓」「槻弓」は、それぞれ、梓・檀（まゆみ）・槻の木で作った丸木の弓で、「弓」が月を連想させ、「槻」に「月」を掛けて「年」を導く序詞としたもの。なお、先の「神楽歌」をもとに、「し

うな歌を詠み、帰そうとしたのはなぜか。
補 答 新しい男と今後の人生を送る決意をしたから。女は、自分の今の状況を伝えたうえで、男の出方を見たかったのかもしれないことにも触れる。

問 **「梓弓まゆみ槻弓」（8行目）とは何か。**
答 それぞれ梓・檀（まゆみ）・槻の木で作った丸木の弓。

補 「年」を導く序詞。

「槻」に「月」を掛けて「年」の序詞としたもの。「神楽歌」の本歌にも触れるとよい。

問 **「梓弓まゆみ弓」（8行目）の歌に込められた男の気持ちを述べよ。**
答 二人の愛は既に過去のものとなったことを無理に自身に納得させて立ち去ろうとしている。

補 「我がせしがごと」に着目させ、改めて過ぎ去った過去の時の重さを感じていることを理解させる。

問 **「梓弓引けど」（10行目）の歌に見られる修辞上の技巧をあげよ。**
答 「梓弓」が「引く」を導く枕詞。

補 「梓弓」は「引く」「はる」「いる」「音」などを導く枕詞である。

問 **「梓弓引けど」（10行目）の歌に込められた女の気持ちを述べよ。**
答 依然として男への愛は変わらないという気持ち。

補 男の歌を聞き、男との過去を思い出し、自身の真の気持ちに気づく。

なじなのつらいことをしのんで」の意を込めたとする解釈や、弓は男が手に取るものだから、弓を女にたとえて、もとの男が新しい男に「この女を、私が愛したように、あなたも愛しなさい」と言ったものとする解釈がある。「うるはし」は、「きちんと整って端麗だ」の意で、人間関係に用いて、「礼儀正しい、折り目正しい、仲がよい」の意になる。「み」は、形容詞の語幹について名詞化するはたらきを持つ接尾語。

10 梓弓引けど…　「万葉集」巻十二「梓弓末のたづきは知らねども心は君によりにしものを」（「古今六帖」第五にも）、「古今集」恋二に「梓弓引けば本末我が方によるこそまされ恋の心は」（春道列樹）、その他の類歌がある。弓を引くと上下の端（本末）が寄るところから、「よる」と「弓」とは縁語。「引けど引かねど」は、「（あなたが私の心を）引こうが引くまいが」の意で、「ど」は逆接恒常条件の接続助詞。もとの男（歌の相手）が女の心を引く意に解したが、他の男が私の心をと解する説もある。もとの男が「我がせしがごと」と言うのに序とした「梓弓」を受けて、「梓弓」が引くと言っているので、「他の男が」とする解は不自然か。「ものを」には接続助詞と終助詞の用法があるが、ここは詠嘆の意を含んでいるので終助詞。「…なのになあ」という逆接のニュアンスを含んだ詠嘆の意。

11 後に立ちて　「後（しり）」は、物の後部に当たる所や、細長い物の末端を言う語で、ここは、「後ろ、後方」の意。

12 清水のある所　水を飲もうとしたのであろうとする注（「日本古典文学大系」ほか）があるが、それも含めて、激しい活動の後の休息の場として、水辺がふさわしいと思われ、ここでは、それが生の休止の場にもなるのである。

12 指　「名義抄（みょうぎしょう）」に「指、ユビ、俗云オヨビ」とある。

14 あひ思はで…　「あひ思ふ」は互いに愛し合うこと。「あひ思はで」で「私が思っているのに、あなたは私のことを思ってくれないで」の意になる。「とどめかね」の「かね」は「…することができない、…することに耐えられない」の意を添える補助動詞「かぬ」の連用形。

●七〇ページ

1 いたづらになりにけり　「いたづらなり」は「無駄だ、無益だ、空虚だ、むなしい」の意の形容動詞。「いたづらになる」で、死ぬことを表す。

問 **女が昔の男を追うに至る心の推移を述べよ。**

答 新しい男との結婚を一度は決意したが、昔の男の歌を聞いて過去のことを思い出し、自身の男への変わらぬ愛に気づき、帰ってしまった男に逢いたい、男の愛を取り戻したいという熱情にかられた。

問 **「あひ思はで」（14行目）の歌に込められた女の気持ちを述べよ。**

答 男の愛が永遠に失われてしまったことへの嘆きと力尽きて死んでいく女の静かな諦念。

補 「伏しにけり。」（六九・12）「消え果てぬめる」（同・14）に着目させ、清水のほとりで指の血で岩に歌を書き付けて死んでいく女の気持ちを読み取らせる。

鑑賞

この第二十四段と前の「筒井筒」の段とは、同じ「田舎」を舞台とした、男女の三角関係の話である。二十三段と二十四段を比較すると、一人の男と二人の女に対して二人の男と一人の女、主人公夫婦のハッピーエンドに対して女の悲劇的な死の結末、というような対照性がある。しかも、中心は、女の変わらぬ純情が主題となっていて、業平の歌によらない二つの説話をここに並べたのは、このような物語の特性への興味があるように思われる。

第二十三段では、男の心がもとの女に戻ってくるのが歌徳説話による構想に従っているためか、女の純真を印象づけるものが「いとよう化粧じて」しかなく、訴えるものがやや弱い感がある。一方、第二十四段では、ただただその女の哀れに集中していて、女の愛の純一さに心打つものがある。男の音信が途絶えて「三年来ざりければ」「待ちわびて」と、女が三年もの長い間男のことを待ちわびて、思いを残しながらも、「いとねむごろに言ひける人」の求婚を受け入れることになった経緯が語られている。女は、昔の男に対する愛をなくしたり、自分を捨てた男を恨んだりしたのではなく、男への愛はそのままに、「ねむごろに」情愛を示してくれる男と残りの人生を生きていくことにしたと言うのであろう。その新枕を交わすと決めた日に、昔の男が帰ってきたという衝撃の中でも、まずは男と顔を合わせることなく、帰そうとしているのは、女の、自分の後半生の生き方として選び取った現実に生きる、つつましやかな姿である。

「あらたまの」以下の三首の歌は、よくこのときの女の心の有り様を表していて、この段をより魅力のあるものにしている。「あらたまの」の歌は、今宵は新枕を交わすことになっているという事実を単純に伝える表現に、思いがけない成り行きとなったことへの驚きと嘆きを痛切に感じさせる。それに答えた男の歌は、この段であくまでもワキを演じる男らしく、「梓弓ま弓槻弓」という、神秘的な霊威を感じさせるイメージで「年月」を示して、「我がせしがごと」と提示された男との愛の世界は、女をたちまち「昔より心は君によりにし」という思いに引き戻してしまう。「ねむごろに言ひける人」と共に生きようとした現実の生活は、「君によりにし」世界が女にとって真の生であったことの前に、全く意味を失うのである。

去った男の「しりに立ちて追ひゆ」く道行きの間に、女の生は激しく燃焼し尽くしてしまうのであって、清水のほとりで倒れ死んだという結末は、唐突な印象とはならず、女の愛の純一さを描き出したものとなっている。清水のほとりに倒れた女と、傍らの岩に血文字でしたためられた辞世の歌とは、誠に鮮烈な絵となって、女の哀切な死を描き尽くしている。「あひ思はで離れぬる人」には、失われたものへの嘆きが、「我が身は今ぞ消え果てぬめる」には、沈んだ諦念が、しみじみと歌い出されている。